

教師・大村はまの生涯・素描

・・・大村の教育信念と教師生活・・・

広田 忍

A Summary of Hama OHMURA's Career as a Teacher

・・・Her Pedagogic Creed, and her Life as a Teacher・・・

Shinobu HIROTA

E-mail : hirota@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：大村はま，教育信念，人間の気高さ，人間の葛藤，思春期，男の妬み

keywords : Hama OHMURA, pedagogic creed, dignity of the human being, conflict of the human being, adolescence, jealousy of the male

はじめに

筆者は先に、国語教師・大村はま女史（1906年～2005年没）の＜教育に関わる言葉＞をいくつか取り上げ、その解説を主とした論考を著した^(注1)。その内容は、大村の生き方、人生観、人間観、子ども観、国語教育にける大村女史の意気込みと意図、授業実践（「単元学習」）の工夫の実質、戦後日本の受験教育体制に立ち向かい抗う大村の姿など、すなわちそれは、大村の国語教育の授業実践及び授業論を中心とし、さらにそれを支える大村の人生観・教育観・子ども観等を解説するものだった。がしかし、その論考は、当時もそうだったが今から語っても、必然的に大村はまの人生または履歴、特に職歴そのものに関わり、大村の人生の歴史的な回顧・史実を明らかにしておくことを前提とするものだった。端的に言えば、大村が戦前戦後勤めた諸学校の名前や期間、具体的に言えば戦前では高等女学校の名と期間、及び、戦後では中学校の名とその期間、さらに、そこにおける教師・大村の教育実践などを或る程度明確にし略述することが求められていた。言葉を換えれば、大村の人生の歴史的な回顧・史実、特に戦前戦後勤務した諸学校に関するそれらの諸知識を得ている人とそうでない人との間には、筆者のその論考の理解の仕方に相当の差が生じる内容となったと筆者は推測する。

この意味では筆者自身が当時その中で記したように、＜大村はまの略史＞それ自体を予定するものだった。しかしその元の論考の長さの故に、当時、そ

の＜略史＞を省かざるを得なかった^(注2)。その略した＜大村はまの略史＞をここにあらためて記したのが本論考である。この論考と併せて、筆者の当時の論考を読んでもらえるなら望外の喜びである。

ところで、漫然と略歴を記したり、大村のたんなる史実的事項の羅列・記載を行なうとすれば、読みにくいものになるのは避けられない。と言ってあまりにも解説を長くすると、当論考の意図が半減する虞（おそれ）もある。しかしそうした危惧もありながら、大村がたえず＜子どもたちの学び＞に求めていたように、筆者は＜楽しみのある＞記述となるように本稿の執筆を心がけた^(注3)。したがって筆者は、この＜大村はまの略史＞を、大村自身の履歴に基づいて記すのはもちろんだが、その途上で、特に大村はまの性格形成過程という点から考えさせられる若干の事実・エピソードを加えてその解説を試みる^(注4)。それは、そのまま教師・大村はまの成長の過程をも説明することになるだろう。そして、この記述全体は大村の成長過程と、教師への成長過程と職歴及び、教師としての実践の概略を語るものとなるはずである。しかし、ここで断っておかなければならないが、拙稿は、いまだあくまで試論であって、あれこれの断片は、今後いっそう厳密にされるべき内容となっている。このことを了解されたい。

＜依拠する文献＞

大村はまの生涯、その人生に関して記された著作・文献は少なくはない。ここでは、『大村はま先生教

職生活五十年の歩み』(1978年)の中の「第三部 今日の日まで」を中心に大村の履歴を取り上げ、その細かな事実の記載は以下の四点の文献に依拠する。上の小品を中心にするのは、これを大村が自分で記したと大村自身が語っていることが主たる理由である。これ以外の四点とは次の通りである。

- (1) 『「日本一先生」は語る』、聞き手は原田三郎、国土社、1990年。大村に関する詳細な史実が語られている。以下『原田三郎(聞き手)』と略す。
- (2) 『22年目の返信』、波多野完治・大村はまの往復書簡集、小学館、2004年。
- (3) 『学びひたりて』共文社、2005年。
- (4) 『大村はま国語教室』別巻、「自伝 実践・研究目録」筑摩書房、1985年。以下、『国語教室』別巻と略す。

これらの四文献のうち、第一の文献は、聞き手(原田三郎)がいるところでの語りを主としたものであり、当論考で大いに利用することになった。第二、第三のものは大村の晩年の著作である。大村においては年齢に関係なく、つねに叙述の誤りはないと判断されるが、それでも最初に挙げた『大村はま先生教職生活五十年の歩み』(以下、『教職生活五十年』と略す)は、上の五つの文献のうち最も年代が早い時期のものであり、これと最後の著作との間には27年間の隔たりさえある。このことは前者を選ぶ理由の一つとなろう。しかし、年齢の計算等や年度を表す数字は、上の第四の文献やその他には、多少疑問の箇所がないわけではない^(注5)。おそらく「数え年」で年齢等を計算したからかも知れない。

また前稿と同じく、大村はまを全国に知らしめた『教えるということ』(共文社、1973年)からの引用の場合は、(p.26.)などと記す。本文中に、このような記述があれば、この著作中の「p.26.」と了解されたい。さらに、上の諸文献の刊行年、出版社は、特別の場合を別にして、「注」の中では記さない。

以下の叙述は、通常の人物史に準拠しながら、<誕生から幼年期>、<少女時代>、<青年期>、<新しい教師生活>、<戦後の大村はま>という項目を予定し記す。

I 誕生から幼年期

・・・「個人主義」の胚胎期

大村はまは、1906年、明治39年6月2日、横浜

に生まれた。父も母もクリスチャンであり、上に六つ上の兄(長兄・^{つなお}維雄)、四つ上の姉(長女・澄子)、二つ上の兄(次兄・勝雄)があり、兄弟としては四番目、つまり次女として生を受けた。当時、父は私立の女学校(共立女学校)の教頭職にあったから、教育関係の家庭に生まれたということになる。がしかし、そのことより両親がクリスチャンだったということが大村はまのその後の生き方に大きな影響を与えたと考えられる。つまり簡単に言えば、信仰を持つすべての人、またすべてのクリスチャンがそうだと言えないかも知れないが、しかしこの大村はまに限って言えば、その両親の信仰するキリストの教えに沿っていたのだろうか、あるいは、母親の何かがそういう大村はまを育てたのか、大村はまは、たとえばむやみにまたは無自覚に他人に干渉を加えたり、その存在を軽視したり軽んじたりすることはほとんどなかった。むしろ、人一人のそれぞれの考え方、あり方を非常に尊重した人である。そのことは前稿における筆者の解説ではっきりしていると思われる。つまり、一人ひとりの人その人を人間として意識的に尊び、その人間の気高さを大切に扱い、それが脅かされている人に対しては大きな愛情で<守ろう>とさえした。この意味で言えば夏目漱石と同じように、大村は「よい意味での個人主義者」であった^(注6)。またこの姿勢は、幼い頃から一生継続しており、その幼年期や少女時代の頃のことを思い出して、後になって自分で自分を責めたりすることがあったりするほどである。そのことはこの論考で明らかにする。それは、現在の中学2・3年に該当する年齢で記された大村の作文にはっきりと示されている^(注7)。このことは大村はまの<生涯>、<略歴>、<人生>、・・・その他さまざまに呼べるのだが、・・・大村はまを語る時におさえておかなければならない第一のことであり、同時に教師・大村はまを語る時、必ずおさえておかなければならない原則でもある。要するに教師・大村はまを理解するためには欠かせない視点である。

筆者は、大村ほど語彙が豊かではないが、敢えて乏しい語句を用いれば、大村は<独立独歩の生き方>を好み、<人間の気高さ>を追い求め、逆に、たとえば<是非曲直を歪める人たち>、<人に追従して(時に権威に盲従して)生きること>、<馴れ合う集団>などを感覚的にも生理的にも嫌った人だったと考えられる。大村のよき理解者だった倉沢栄吉

との対談に「対談・独立した教師像^(注8)」という題名が付されているのも、大村と倉沢の考えが一致していたと同時に、この二人は、日本の教師たちがそうした姿勢を持っていないことに対して、或る種の危惧と危険性を感じていたからだと思われる。

後、1908年、明治41年に、父が親戚の人々の事業を助けるために一家で北海道札幌に渡る。大村の二歳の時である。大村の家庭の何らかの経済的な事情もあったとみなしてもいい。この地で長兄・維雄^{つなお}を亡くす。口数の少なく妹思いのやさしい兄だったようで、後に、すなわち現在の中学3年生に相当する年齢になった時点（捜真女学校三年生の時点。女学校進学時のことは後述する）で、北海道の頃のことを懐かしみながら、当時のことを詳しく記し、「今、兄さんがいらしたら、どうだろう」とも、「今まで兄さんが生きて居て下さったら、私はもう少しのんびり育ったかも知れない^(注9)」と記しているのが注目される。……北海道移住後のずっと後の、再び横浜に戻った後の女学校三年生時の文章だから、その当時は、自我意識が強く、その作文の内容は、どのような自分であつたらいいのかという葛藤の少女時代を送ったことを十分に予想させる。それは今直前で語ったことから推測されるように、周囲の級友、仲間、友人に、安易に溶け込むことをせず、親しい友人を作った時でさえ、「自分の名誉や栄誉、先生や級友によく思われたいという意識からの行為ではないのか」と悩むほどの自我意識の強さを大村は持っていた^(注10)。逆に言えば、＜周囲の人に対して、自分が本当の親密感・親しさで接し得たのかと＞という疑問をつねに生じさせ、それは前述の通り、周囲の人を敬愛していたのかという疑問、自問にもなった。（これは、「Ⅱ 少女時代」、及び、その後の「Ⅲ 捜真女学校生時代」のことであり、特に前者の時期に顕著だったようだ。）

閑話休題。

大村が六歳の時に（年代は不明だが、1912年の6月1日の「満6歳になった日」以降、1913年の3月までの間の或る時期と考えられる。このすぐ後に述べるが、次兄・勝雄が亡くなるのは＜大村はまの小学校に入る年の3月17日だった^(注11)＞とあるので、この期間を想定しなければならない）、一家は再び横浜に戻り、父は横浜のYMCAの総主事を務め、現在で言えばカルチャーセンターとでも呼べるようなYMCAの建物を設立しその経営にあたった。

したがって一家はこの時期にはそれほど貧しい境遇にはなかったろうと考えられる。しかしYMCAの総主事、センターの経営者としての父の地位は、1923年（大正12年）の関東大震災を経て他の人によって奪われ、結局、この事業は成功していたのに、父はサラリーマン勤めの生活を余儀なくされた。父は文部省内にあったパーマー英語教授研究所に転出し勤めた。

Ⅱ 少女時代・小学生の頃

……次兄・勝雄の死とその事実の凝視

いわゆる遅生まれである大村はまは、1913年、大正2年4月に、満六歳と十か月で横浜市立元街小学校に入学する。その当時、いわゆる大正自由教育運動^(注12)の波に洗われたからだろうか、この小学校は、「今日、そのまま存在しても、新しい行き方の学校の一つになれるのではないか」と大村は後年述懐している^(注13)。具体的に言えば、全校の児童参加の月例運動会、合唱主体の音楽コンクール（これも全員参加）、毎日昼食後の15分という短い時間を使って、クラスごとに開催する小学芸会を行なうというのがそれだった。たとえばクラスごとの小学芸会は、クラスの席列による輪番制で当番（出番）となり、子どもたちが進行・司会をやり、子どもたちが、「なぞなぞ」を言い合ったり、また子どもたち自身の振り付けによる歌謡と舞踏、……それぞれが人形を抱いて、それを左右に揺らして歌を唄うだけの「振り付け」だった^(注14)……それだけの小学芸会だった。がしかし、そんなことを子どもたちにさせる元街小学校の先生方の教育方針は、子ども自身の自発性やたしかな意志、さらに自由な躍動感を育むということに力点をおいたということ、及び、「全員参加」に見られるように、一人ひとりの子どもに不公平感を感じさせずに接しようとする事だったと推測できる。「平等」という戦後の教育理念の先取りである。大村自身の言葉で言えば、この小学校では何かを教え込まれたというより、「小さい子どもの精神をとて前向きに育てたのだと思います。私はとにかく育てられたと思ひまして、ありがたく思っています^(注15)」と語っている。

誰にとっても言えるのだろうか、小学校時代は、長い思い出が少ない割りに、一コマ一コマの思い出がなつかしく思い出されるものである。学校生活の思い出もそうだろうが、特に家庭や地域や自然の中

で近所の友達と遊んだことが思い出される。

夏には水浴びに川原へ行ったこと、夏の日差しが強かったこと、もう稲穂はかなりの高さにまで生長しており、秋や春の思い出も自然の中での遊びが主に思い出される。冬は、北海道時代の幼い大村はまがそうだったように、箆を引いただけのスキー遊びを楽しみ、春は菜の花畑、れんげ草の中を駆け回り、秋は野いちご取りに大きな川べりまで遠出をし、そこを走り回ったことなどなどがある。年中、道路で集団遊びに夢中だった。けんけん遊び、宝探し、その他があった。

大村はまにとってもそうした思い出はあったろうが、それらはどういうわけか、北海道での長兄・^{つな}維雄兄さんの思い出、しかもはま自身の五歳前のこととして語られているに過ぎない。つまり、前に言及した「長兄・維雄」に関する作文も、北海道のことが主として思い起こされている。小学校に入る前のことである。

大村は、『教職生活五十年』の中では小学校時代にお世話になった先生方を逐一挙げているが、ここではそれらは省略する。しかしむしろ、大村はまの性格形成に何らかの影響があったと思われることがもう一つあげられる。いくらか重要な出来事である。

それは小学校に入る直前の、つまり横浜に再び戻って以後すぐの、次兄・勝雄の夭逝のことである。大村は捜真女学校の三年生の時、その次兄のことを長い作文として残している。やや長いが、大村の性格を考えるためには重要な一文なので、その要約と原文を記す^(注16)。現在の中学3年生にあたる時点の作文である。

<次兄・勝雄は、体が悪く言葉も語れず自分で動くこともできなかった。私が、この兄の食事を食べさせてあげたが、それは1時間ほどかかるのだった。幼い私の仕事としてはたいへん辛抱の要る仕事だった。そんな私の姿を知っていて、周りの人が「はまちゃんはやさしい子だ」と語るのだが、それと正反対に私には苦痛だったし楽しい仕事ではなかった。そして、私はいつも食事係りだったが、とうとう私が小学校に入る年の3月17日に兄さん(次兄・勝男)は亡くなった。今になって、その兄さんがつらかったろうことを思い出し、また私は、兄さん・勝雄に対して尊敬の心があったろうかと思ひ出されて悔やまれる>と。

少女・はまは続けて書いている。

「兄さんといふ尊敬の心が私には少なかった。兄さんに深くはいつて、その中にある心を見るには、まだ私があんまり小さい人間であった。自分の心を見極めることの出来なかった私には、病人に対してのほんとうの同情がなかった。私は人の苦しみを考へることが出来なかった。何にもおっしゃらない兄様が、愚かな私には何にもわからない人の様のような気がした。そして私は兄さんの死まで一度も、「兄さん」と呼ばなかった。「勝ちゃん、勝ちゃん」と私は云って居た。まるで弟でも呼ぶやうに。病気であるといふことのために、軽々しくたやすく人に対しての気持を変へて居た私は、自分に対してもしつかりした心がなかった。その頃の私は、なんてみすぼらしい私であつたらう。私は兄様の死の前に、「兄さん」と一度でも云つたといふ記憶がほしい。然し私の思ひ出をどんなに探してみても、そのおぼえは見出されないのだ。私は兄様をばかにして居たのだ。口のきけない不具のかはいさうな兄様を、自分より低い様に思つた私の心は、なんてみにくいのであらう。人の不幸に泣いて上げることを知らない、自分さへ不幸でなければ人の不幸を、その人の罪の様な気でながめる石より固い冷たい人間、それは私であつた。私は今、兄様の前に泣きたい。……今まで幾度この事が私を苦しめたらう。」

この後では、<私の裏腹な気持を知っている人がいないこと、そのことがかえつて苦しいこと、その私の気持を知つて、むしろ誰かに叱られ責められたほうがいい。しかし私の心は、誰よりも、兄様に何の世話をしなかつた人よりも、ずっとみにくい心のままだつた、偽つた真実のないゆるんだ心だつた>と、述懐している。

この一文を自我意識が強いとみるか、現在の中学3年の子どもと比較して文がうま過ぎると技術面でほめるべきか、真情が満ちているとみなすべきかさまざまだらうが、こういう事実と作文が大村の少女時代にあつたことは事実である。どれだけ本当のことが書けているのか知る術がないが、相当に苦しんでいたことは、この後にもずっと続く文章で明らかなるように思われる。特に文中の「病気であるといふことのために、軽々しくたやすく人に対しての気持を変へて居た私は、自分に対してもしつかりした心がなかった」という下りは「自分」に対する厳しい分析であり、今後、人に相対して<公平無私>であ

ろうとする少女・大村はまの決意の表明である。さらに、「自分さへ不幸でなければ人の不幸を、その人の罪の様な気でながめる石より固い冷たい人間、それは私であった」という一文も少女・はまの重要な告白である。それは、＜自分が不幸でないがために、人の不幸を知って、その人を罪人であるかのようにながめる自分＞を責めている一文である。大村のこうした回顧、厳しい自己内省を知って理解されることは、私たちがこのような自己分析をなし得るか否かという疑問であり、結論として、このような自己分析をなし得ないということ、そして、それが可能にならないのは私たちにはいったい、今、何が欠けているのか、逆にこれが可能になるためには今私たちが何をすべきなのかさえ不明になってしまうということである。現在の高校間にいわゆる学校間格差が生じていることは多くの人認める事実である。このような中で一人ひとりの生徒が＜学力差＞で序列化されて中学を過し、また序列化されたまま他の生徒たちをみつめて過ごして来た現在の私たちは、……筆者もその一人である……とても気づいたり思いついたりできる内容ではないと判断される。少女・はまの上の二つの自己分析に関して私たちはそのように言わなければならない。このことに関連して言えば、大村のこの文章を毎日新聞論説委員・原田三郎（聞き手）もまた非常な「驚きをもって」評価している^(注17)。この意味では、私たちは、現在の学校教育体制の中でそれぞれが自分の意識を歪め低め、また歪めさせられ低めさせられ、そうして生きて来ているのではないかと考えられる。敢えて言えば、幼い大村はまのような自己分析をなし得ない私たちは、現代の受験中心の学校教育体制の被害者になっていると断じることができる。なぜなら、現在の私たちは、少女・はまの言葉をまねて使えば、「学力の有無または高低」で、その自分の態度を「軽々しくたやすく人に対する気持を変えている」ことになり、「自分に対してもしっかりとした心がない」ということになるのは自明だからである^(注18)。

女学校三年生の時の大村はまのこの一文は、その後、＜兄様にお別れをなさい、と言われて、（その最期に）兄様が死んでから私は始めて「兄さん、さよなら」と言った＞と続く。

この文の最後では「兄さん、さよなら。」と云っ

たあの時の様な、緊張した隙のない心で自分の生活に耳を澄ましなが、私は生きてゆきたい。それは兄様が私に望んでいらしたことなのだ。」と記されている。（強調点は、引用者。）

小学校入学の2週間ほど前の「6歳と10ヶ月」の幼い少女が体験した自分の次兄・勝雄の「死」。さらに、これを決して無駄にしたいという意識を持ったことが、その後およそ10年経過してからだが、その文章全体から伝わってくる。長兄・^{つな}維雄の死の時も同じ感想が語られてはいるが。もちろん作文それ自体は、捜真女学校三年生の時のものだから、兄の死を追体験し回想した上で上のように語っていることを正しく理解しなければならない。

晩年の大村はまは、1990年、長兄・維雄の死の時には（北海道時代）、自分が馬車に乗ってはしゃいだり、白いリボンをつけて嬉しそうにしている写真が残っていると語っているが、しかし次兄・勝雄兄さんの死・夭逝に関しては、「小学校に入る年の三月でしたからかなり死ということがわかりました」と述べている^(注19)。

いったい全体、幼い子どもが、このように自分の兄たちの死に当面してこれだけのことを考えるのかどうかは、筆者の推測の範囲を超えた筆者には不思議にさえ思われる。時間を女学校の三年生（現在の中学3年生）に正しく移動させたとしても同じように筆者は語るだろう。というより、大村はまの人生の初期に生じたこうした出来事が、思春期のさなかにあった少女・大村はまをして多感で思慮深く物思いの深い人を形成させたと語るべきなのかも知れない。そうしてこのような人間形成を行なうために、人には「思春期 adolescence^(注20)」というものがあのだと言うべきなのかも知れない。逆に、「思春期」だからこそ、こうした自己分析が行なえたと考えられる。しかし、はたして「不思議だ」と考える筆者には、そのように考えまた思慮深くみつめるべき事実や不幸な出来事が欠けていたか、あるいは他方、そういう事実と出来事とがあつたにも関わらず、それをそれとして認識（identify）する何か或る背景が欠けていたということだったとも考えられる。つまり、それらを凝視しなくてもよいような何か別のもの、つまり自分の「生」を紛らわす何か別のものが余りにも多くあり過ぎたのかも知れない。逆に言えば、少女大村はまには、そうしたも

のさえ決定的に欠けていたこと、・・・大村はまが女学校に在学した年代（現在の中・高校生に相当する）は、大衆娯楽といったものはほとんど見出せない大正時代の後期である。「ラジオもテレビも週刊誌も、車の洪水も空の旅も、それに何よりも衣食住の多くを知らなかった時代^(注21)」の社会・・・そのことが彼女をして多感で思慮深く物思いの深い思春期を体験させたのかも知れない。大村一家の経済的貧しさを指摘するのは早計だが、しかし人間の成長過程において「思春期」(adolescence)がそれとして機能する条件や要因を分析すること、・・・このことは、一人ひとりの子どもの人間形成上ぜひ明らかにすべきことがらのように思われる。一人の教育研究者にしか過ぎない筆者が語るにとしては口はばつたい言い方になるが、敢えて記しておきたい。

一方で、その後の女学校時代はかなり作文を書くことが好きになり、なんの苦痛でもなくなったという事実を指摘できる。しかし、この次兄・勝雄の夭逝の事実は、前述のとおり大村はまが小学校に入学する前の2週間ほど前のことであり、そのことを後の女学校の三年生の時点に、つまり現在の中学3年生になった時点で大村が記したわけである。しかも「今まで幾度この事が私を苦しめたろう」とあるのだから（この意味の表現は、この文章中に二度語られている）、それは、小学校時代を通じ暗い思い出として繰り返し大村はまの脳裏に思い起こされたものと考えられる。おそらく、後に諏訪高等女学校に赴任して後、大村はどの生徒にも親身に対応し、また優しすぎる接し方に終始するし、特に逆境にある生徒には人一倍のやさしさを示すのだが、そのことが可能になったのは、この次兄の死が、大村のその後の生活の中で、また心の中で、いわば通奏低音のように響きながらたえず思い返されていたからではないかとも思われる。同時に、人それぞれが尊い、人はみな気高いという漠然とした信念がいつのまにか確実に大村の心の中に育って行ったとも思われる。

III 捜真女学校生時代

・・・国語への集中と経済的困窮の中で

そんな幼年期少女時代を過ぎて小学校を卒業した後、大村は共立女学校に一時進学するが、1年後に別の女学校（「捜真女学校」）に転入学する。転入学をする理由は、共立女学校が文部省の上級学校進学

の資格を持たなかったからであり、姉・澄子は共立女学校を卒業したため、上級学校（東京女子大）への進学のために相当な苦勞をしていたのを両親が知っていたからである。当時、共立女学校は、いわば、現在の学校教育法で言う「一条学校」ではなかったということになる。転入時点の学年は共立では「予科一年生」だったが、捜真女学校で「本科二年生」と認められた。したがって、捜真女学校生としては二年生から五年生まで在学することになる。

そしてこの転入学は、大村の人生に決定的な影響を与えた。生涯を通じて尊敬することになる一人の女性国語教師・川島治子に出会ったからである。大村は、前の共立女学校時代、作文と言え前々から文語体で記さざるを得ず、13歳前後の大村はまはそれが不満でもあった。「大嫌い」でもあった。作文を書こうという気分にもならずしぶしぶと国語の授業を受けていた。しかし、捜真女学校へ転入学後、思い切って口語調の作文を書いて提出したが、担当の教師・川島治子はなんの注意も与えずそれを許してくれた。その結果、「今まで何となく不満」だった作文が好きになって、書きたいとさえ思うようになったという。こうして文字を通して自分を表現することに苦痛を感じなくなり、この捜真女学校時代、特に三年生の学年では、家族のこと、たとえば長兄の思い出、次兄の思い出、姉、父のことを巧みに作文にし、自分の心の中の思いのたけを文にして行った。このことは上で紹介したとおりである。したがって、上で述べておく必要があったが、作文を通して自分を表現することに大きな喜びを見出し始めた。

さらに、その直前の二年生の時のこととして大村は、「私には、＜国語＞は、＜好き＞以上の離れられないものになった^(注22)」と記している。推測だが、それは捜真女学校への転入学後すぐのことであり、おそらく作文だけでなく、教師・川島治子の国語の授業が、大村やその他の生徒たちの学ぶ意欲に積極的に火を灯したということでもあろう。大村はこのことを、「先生は、弱いおからだのつづく限り、主体的に創作的に野心的に、国語の授業をしてくださった^(注22)」と記している。これだけでは具体的なことがわからないが、おそらく教師・川島治子が、一人ひとりの子どもの創作意欲、学ぶ意欲に何の制約も加えず、さまざまな教材を駆使して巧みにそれらの意欲を喚起するといった、いわば「育てる」授業実践を行っていた事実を意味するのだろう。大正自由

教育運動の理念を、この川島治子は文字通り実践していたということになる。

三年に進んでから父の収入が定まらず家計が苦しくなってきた、この三年生の終りの時点には、「学業をつづけることがほとんど不可能になった^(注22)」という。この言葉は毅然として語られている。

理由を記せば、父のクリスチャンとしての誤った意識のなせるしわざだった。つまり給料日には、自分の周囲にいる貧しい家庭の人々のことを知ると、彼らになにがしかの寄付をして帰宅するのだった。だから母親は、時々、私たちも食べていかなければならないことをお忘れなく、と父親をたしなめることもしばしばだったらしい。クリスチャンであるが故に、大村もまた<慈善><奉仕><献身><犠牲><寄金・寄附>などに関して、否応なく自分の考えを持たざるを得なくなってきたのは必然であった。わずか12歳から17歳の年頃である。このような経験をしている人は、今はまったくいえないだろうが、今の人たちは、このように真剣な問いをしているのか否かということ言えば、一般的にはそんな文化風土にはいないだろうと筆者は推測している。こうした哲学めいた、また、俗に言う<人生に如何に対処するか>を考えさせられたということ言えば、大村はまの少女時代は、或る意味で一人の人間としての真剣な課題を無数に突きつけられたと言っている。それは無意識にだったと語ってもいいが、しかし、そういう風土にいる人と、及び、慣習、慣例がそうだからとそのまま何の疑問も持たずに生きる子ども・人との間には大きな差が生じるだろうと考えられるのである。

この後家計の苦しさのせいで学業が続けられなくなったが、捜真女学校の教師ミス・ビッケルが、匿名の形で（後年まで名前を伏せて）、大村の授業料などの世話をしてくれることになり、その後学業生活に戻ることができた。しかし、そうはいうものの苦しい家計には変わりがなく、大村は当時のことを、「寮に入り、特定の場所の掃除をすることによって生活費を免ぜられ、学業をつづけられたが、写してすました教科書もあった^(注22)」と記している。

しかし仔細に見れば、現実には、「寮に入り」、さまざまな場所を掃除して生活費を免ぜられたというより、むしろ、玄関、トイレ（来賓用のそれ!?）、食堂その他のさまざまな場所を掃除するというアルバイト目的で「寮生活」に入ったと語ったほうがよ

い^(注23)。とりもなおさず、このことは自分の家庭の経済的な困窮を感じるとともに、大村はまの勉学意欲をもいっそう掻き立てた。上の「写してすました教科書もあった」という表現は、大村の『教職生活五十年』の中の言葉だが、この言葉から、勉学に機敏に対応する大村の姿勢が推測される。すなわち無駄なものはさっさと省いて前に進むという姿勢がそれである。したがって清掃というアルバイトは確実にこなし、その他省けるものは省くという姿勢を、筆者はこの文言に垣間見るのである。後年、大村は、「私は自分では、幼い頃から物事をあり合わせの力でやらないというのをモットーとしていました^(注24)」というのだから、そうした割り切りがこの時期の大村には確かにあったしまた必要であった。ミス・ビッケルの厚情もあり、また自身のアルバイトあって、それでいて不十分な勉強で済ますのでは、なんのための女学校進学だったのか・・・おそらく、そうしたよい意味での割り切りが捜真女学校のその後の勉学を確かなものにしたと思われる。後述もするが、「成績が悪かったらやめることになっていました」とは大村自身の言葉である（p.11.）。

筆者は前稿で、大村のことを「お嬢さん育ち」「世間知らず」と記したが、おそらくこのアルバイト仕事は、・・・玄関、トイレ、その他の特定の場所の清掃は・・・ささいなことのようなのだが、そのまま後の諏訪と第八高女時代の教師生活に生きることにもなる。それは後述する。

この捜真女学校時代に、関東大震災に遭遇していることも、後の大村の人間形成にかなり大きな影響を与えたと思われる。大村の言葉では、クラスの半分の級友（20数名）が亡くなったというから、この時、この機会に、<人間が生きていくこと>に伴う不条理を感じたろう。この時の大村の年齢は<遅生まれ>だから「17歳」であり、学年にすると現在の高校2年生の時である。既に大村の幼少女期に、二人の兄を亡くしていることに加えて、多数の級友の死は、人間の命、個人の存在、その人生というものに、以前にもまして畏れを抱くことになったのは間違いがない。それに前に見た通り「経済的な困窮」が青年期の大村に追い討ちをかけていたろう。「いくら努力してもなるやうにしかならぬ。私たちはどんなに努力しても到底ある所までしかいかねないのだ、その時にはあきらめを持たなければならぬ^(注25)」という認識がはっきりと少女・大村はまの

脳裏に焼き付けられた。

IV 青年期・東京女子大生時代

……国語教師への歩み・黎明期

その後、新渡戸稲造の創立した東京女子大に進学する。最終学年に、姉・澄子が在学していたこともあって、この大学に合格はしたが、一年間、姉の卒業を待って入学することにした。家計は依然として苦しかったのである。父の勤務しているパーマー英語教授研究所の事務員として働いた。パートでもなくアルバイトでもなく正式の勤務である^(注26)。捜真女学校時代のアルバイトの経験、及び、入学を遅らせたこの経験などは、大村にながしかの性格形成を強いたと考えられる。敢えて推理すれば、一般のおとなの人たちの職業の世界を垣間見るということもその一つであり、世間を知るということもそれであつたろうし、一般の社会で職業に就くということの真剣さ、……大村は、それらを学んだはずである。『教えるということ』の中で、教師に対する厳しい口調と辛らつな批判がなめらかに語られ、一般の民間企業人の例がたびたび挙げられるのは(p.45～47. p.58～59. p.77. p.80～83. p.84.～p.87.)、そんな経験がたえず大村の脳裏にあったからではなかつたろうか。ここでも、大村が幼い頃から何事に対してもあり合わせの力でやらなかつたという言葉思い起こしていい^(注27)。

やがて姉・澄子の東京女子大卒業と入れ換えに、大村は当大学に入学する。

正式には、東京女子大学高等学部という名前であり実質もそうだった。それは戦前の旧制度の男子のための「高等学校」に匹敵するものだった。しかし男子のそれが旧帝国大学への進学につながるものだったが、東京女子大高等学部には、そのような特権はあり得なかつた。

ここでの学園生活は、創立者・新渡戸稲造の考えの下、集団で話し合う機会も重視されたが、青年期はひとりでじっくりものを考えることも大事だという理由から、一人一室の個室生活に入るようになった。

現在のように、中学校卒業人口の半数以上の若者が大学に進学する時代と異なり、女学校に入ることでだけでもいわば恵まれており少数派だった上に、さらに、その上の女子大学に進学するということはほとんど例外的なことだった。大村の周囲の者がそ

うだったように、無目的な東京女子大への進学を果した者は皆無だったろうし、大村自身もそのように語っている。「(今のように) いわゆる、「学校へでも行こうかなあ……」ということで入学する人はありませんでした(p.10.)」と。

それぞれがそれぞれに経済的な豊かさを背景に、女性の社会進出、「未来への希望と女性解放問題を深く心に刻んだ人たち」(p.10.)がここに集っていた。地方から進学した人、関東・関西の都市圏から進学した人とさまざまだったが、無目的な形で東京女子大に進学した人は到底いながつた。大村自身は、戦後の時代に、エリザベス・サンダース・ホーム(混血孤児の養育施設)を創設した国際人・社会事業家・沢田美喜のような仕事をしたいと思い、また憧れていたと語るが(p.36.)、経済的な問題、さらに、親や親類などを通じて国際的な人脈を得るということにおいて欠けるところがあり、それらが大村のもうひとつの夢を妨げたのはもちろんのことだった。大村にとっては、夢のまた夢だった。付言すれば、そのような憧れを大村が持ったのはいつだったのかは特定することができない^(注28)。

一方、現実の大村はと言えば、この東京女子大においても経済的な困窮はついてまわつた。この学生時代大村は何かと苦労したようだ。

「私は、実は東京女子大に行かせてもらうような境遇ではなかつたのですが、ある宣教師のお世話で進学できたのです。成績が悪かったらやめることになっていました。ですから必死の勢いです。三年間、思いつきりものを考え、ものを読んで……。」(p.11.)

失礼だが、敢えて言えば、入学科・授業料・自分の生活費などを考えると、大村がどうして進学できたのかという疑問さえ生じさせてもよい。しかし、東京女子大生・大村はまは、上の言葉どおりの覚悟と決意の下、寮の中で日本文学の古典に親しみ、明治以降の近・現代文学にも接し、日曜日にもほとんど外出は避け、日曜日に自宅に帰るのも避けるという生活だった。理由は記す必要がないだろう。金銭的に困窮していたからである。

「日曜日読書三昧で過ごしました。どっかに遊びに行くお金がなかつたというのが本当のところですが^(注29)。」

友人たちは、おそらく歌舞伎、演劇鑑賞などに出かけたのだろうが、その間も当時の大村は、読書ま

た読書そして読書の毎日だったと想像される。捜真女学校時代に既にながりの読書家だったと考えられるのだが、大学在学中はそれにもまして広範な読書、さらに、深い読書生活に入ったろうと思われる。近・現代の作家であれば、夏目漱石、森鷗外、田山花袋、二葉亭四迷、徳富蘆花、北村透谷、国木田独步、武者小路実篤、有島武郎、谷崎潤一郎、菊池寛、中勘助、芥川龍之介、長塚節、坪内逍遙、泉鏡花、高村光太郎、宮沢賢治、与謝野晶子、幸田露伴、その娘・幸田文、伊藤左千夫、戦前に活躍していた生活綴方運動の実践家（滑川道夫、国分一太郎など）その他、・・・・ここに筆者が記すことのできない作家も大村の目になったはずである。（古典と呼ばれるものは、古事記、土佐日記、伊勢物語、平家物語、枕草子、徒然草、万葉集、大鏡、源氏物語、本居宣長、賀茂真淵、芭蕉などなど、これらについても筆者はこれ以上記すことができない。確認をとることができないからである。・・・・列挙した順は任意。）

経済的な困窮の中で大学生生活を送った大村だが、しかし、経済的に恵まれた人たちと仲間の間にあって、外出時に何度か誘われ、大村の金銭の出費を申し出る者もいたかも知れない。が、大村はそういう負担感を持ちたくなかったらしくついに同行することがなかった。前述したように、大村の個人主義的な考えが貫かれていた。いわば「引け目」を感じるのを避けたものと思われる。逆に、大村の必死の勢いの勉学が功を奏するのは、言うまでもなく最初に赴任した諏訪高等女学校においてであったし、そこを出て東京府立第八高等女学校に転任した時であったし、さらに戦後の公立中学の国語教師に就いてからである。要するに、まさしく戦前戦後の教師生活においてであった。

この時期の貴重な思い出としては、創立者・新渡戸稲造学長に出会ったこと、二代目の学長・安井哲先生に出会ったこと、・・・・（注30）。

V 教師生活・諏訪高等女学校時代

・・・・国語教師としての旅立ち

1928年、昭和3年3月、大村は東京女子大を卒業する。が、この時代は世界的な不況の前兆と相俟って、日本の社会もまた不況のさなかにあった。したがって就職難の時代だった。教師を目指したがどこにも就職の口はなかった。「大学は出たけれど」という言葉が語られ、この名を付した映画さえ作られ

た時代だった。だから、大村はあまり焦ることはなかったようだ。よく語られる「無意識的教育作用 unconscious education^(注31)」のなせる災いだった。あるいは逆に、「幸せ」だったかも知れない。しかしこの年、八月に入り諏訪高等女学校の女性教師がそこを退職するということから、大村に就職の話しが電報で伝えられた。

「スワコウジョニクルキアルカヘンマツ コマツ」さすがの大村でさえこの電文の意味が読み取れなかったという。が母親の解説で了解。早速快諾。

大村は、後年、「就職決まったら誰だって嬉しいでしょうが、私みたいに嬉しかった人は少ないでしょうね。本当に嬉しかった」と語っている^(注32)。上で見たように大村自身は＜実は東京女子大に行かせてもらうような境遇にはなかった（p.11.）＞と語っているが、ここでの喜びは、母親に経済面で楽をさせてあげることができるというその一念の喜びだったろうし、自活できるということ自体の喜びもあったろう。もちろん、ミス・ビッケルのことも脳裏にあっただろうけれど・・・・。10日間ばかりの準備期間を経て、任地諏訪に赴いた。

大村は赴任前に、東京女子大の当時の学長、安井哲先生（1870～1947）に挨拶に出かけたと思われる。

安井哲は、「大村さん、十年間は生徒ですよ。」「今日まで、早朝から深夜まで一生懸命に勉強したでしょう。そのまま十年間は暮らさなければいけませんよ。十年間は先生なんていうもんじゃない、今のとおりでね・・・・。」と言って大村の肩をたたいて送り出してくれたという（p.11.）。

確信するのだが、貧しい境遇の中にあっただがために、大村が在学中に死に物狂いで勉学する姿勢を知り尽くしていた安井哲の精一杯のまた心の込めた賛辞と激励だった。

赴任してすぐに、大村は英語の授業を持たされたようである。父親の勤務するパーマー英語教授研究所で身に付け、小学校の英語の免許を取得していたが故の諏訪高女校長・三村安治の配慮だった。しかし国語の正式の免許は持たなかった。当時の文検（旧制の文部省中等学校教員のための検定試験）を受け、即合格し、晴れて国語科の教師になった。国語科の免許を持つ前は給料は「70円」だったが、免許取得後は「75円」にしてもらったという。

大村は、しばしば赴任当時の校長・三村安治をす

ばらしい校長と語っているが (p.12.)、それは、年齢的にもそうだが、当時病気で倒れている父親のような存在だったからである。「お前さま、お前さま」と呼び、時には、放課後ぐずぐずしていたりすると「用が済んだんだろ、早く帰って勉強しろ。」とは校長三村安治の言葉であった (p.12.)。それに、戦後赴任した公立中学校長たちの「ふがいなさ」「信念のなさ」「率直さのなさ」「勉強の乏しさ」を意識しまた牽制して三村安治を高く評価してみせたところがある^(注33)。

昭和一桁の年代当時も、給与体系は定まっていたが、その運用は学校によって事情は異なったようである。諏訪高女では給料は校長の自由裁量の中にあつたようである。給料や今で言う期末手当の支給時は、校長・三村安治は、「悪いと思うけど、みんな男の先生たちが困っているんでな」と理由を語り、それが引き継がれて、その後の十年間、諏訪高等女学校時代、大村は一度も昇給を受けていない^(注34)。大村から尊敬された三村安治だが、逆に三村は、大村を女性だという理由から軽く見ていたのかも知れない。結婚していないこともあったろうか。

後年、当時を回顧して、<他の男の先生方に自分の受け取るべき給料をまわした校長先生も校長先生だが、それで黙っている人も人>と、大村自身が自分で自分をあきれるような発言をしている^(注35)。それだけ、大村は女学校時代、及び、東京女子大時代、お金に無縁だったということかも知れない。いわばお金に執着がなかったと言え言える。

その証拠に、母親思いの大村は、自分の給料のうち「35円」を母の下に送金している。手元に残ったのは「40円」だった。中等教育機関の共立女学校をやめさせ捜真女学校に転入学させてくれ上級学校への進学準備をしてくれ、さらには東京女子大に学ばせてくれた母に対するせめてもの親孝行だったのはわかるしそれは確かなことだ。がしかし、大村はまは、幼少期から女学校時代、及び、大学時代、お金に執着するにしても執着のしようがなかったことも事実だったのかも知れない。これは筆者の推測に過ぎない。しかしこの「推測」は当たらずとも遠からずと言えるのではなからうか。大村がほとんど明確に語らなかったことだが、いわば極貧の中で少女時代・青年期を送りまたその学業生活を続けた。そんな人、それが教師・大村はまだった。『教えるということ』の一言々々を読むと、そのことがにじ

み出ていることがわかるはずである。

諏訪という土地は、あの『あゝ野麦峠』(山本茂美著)でよく知られたように製糸工場で栄え、飛騨の高山その他の貧しい農村の家庭から多くの娘さんたちが製糸工女として働きに出た土地である。少し古い話題となるが、明治30年代過ぎから働き振りのよい優等工女は年末までに「百円/年」を稼ぐ者も少しずつ出てきていたという。明治末年あたりには、経営者は彼女たちを「百円工女」と呼び賞賛し、他の女工さんたちの士気を挙げたというが^(注36)、大村はまは教職に就き、たしかに職業、職種こそ異なるのだが、さながら女工さんたちと同じように、いわば<東京からの出稼ぎの立場にあつた>と言っても不思議な感じはしない。それに加えて、諏訪高等女学校時代は、<教えることがバカに楽しかった>こともあり、金銭に執着する気持すら持たなかったものと思われる。

<諏訪高等女学校における教師・大村はま>

・・・教師としての青春時代

諏訪高等女学校での大村は本当に楽しく活気のある教師生活に入ることができた。後に、大村の還暦祝い(1966年)に記した教え子たちの30数年後の記念文集、及び、1982年、大村はまの勲五等瑞宝章受賞の時のお祝いの記念文集には、大村の当時の教師生活の諸断片が事細かに記されていて私たちの興味をひく。

教え子たちの30数年後の手記によれば、大村の国語の授業は、他の先生方のそれとは大きな違いがあつたようだ。手記は以下のようにさまざまな回顧がなされている^(注37)。(教え子たちの以下の手記のうち< >で記したものは筆者が要約したもの、「」で記したものは、大村の教え子の言葉そのままである。)

<それは、やさしいまなざしと強い意思とで行なわれ、たえず厳粛な空気の中で行なわれていた。どうかすると黙祷の時間のような空気の中で、生徒たちは大村先生の来室を待っていることしばしばだった>と一人の元生徒が語ると、「国語の時間のスキのない厳しさ、他のことなど考える間もなくいたずらなどとてもできない息づまるほどのきびしさ」が有つたという生徒、・・・どの生徒も、「大村先生」が他の先生方と違って不思議な緊張感を醸し出していたことをその手記の中で吐露している。

文学作品を読む時間にしても、小学校時代は、読みにくく難解な漢字の意味、言葉使いの意味、熟語の意味の解説などに終始する国語授業に慣れていたのに、大村の授業は、登場人物の感情、気持、意図に迫ろうとする授業であり、ひいては作者の意図、意向を明らかにしようすることに特徴があり、大村の授業方式に戸惑ったと語る生徒も少なくない。また、言葉の使い分けをしきりに強調しその実例を挙げていたらしく、ほぼ同じ意味を持つがしかし場面や文脈によって微妙に異なる言葉が多様にあることを考えさせたりした、という回想もある。戦後の「単元学習」の実践で言えば、「ことばを豊かに」(単元「このことばこそ」)の前身に該当する授業も既に行っていたことが推測できる。そんなことを語る生徒がいれば、またひと言の巧みな評言で「考えさせるよう工夫されていた」と語る生徒もいるし、さらに、大村の朗読の声に感動したという生徒^(注38)、自分の作文を読み上げられて、感きわまる生徒、嬉しくてならなかったと語る生徒、……それらは前述の通り、卒業後30数年を経過しているにもかかわらず、一樣に、当時の大村の教師の勤め振りを類似の特徴づけで語っている。

この事実からすれば、それらの手記・文章には大きくかつ極端なフィクション・誤記はなく、それはそのまま、当時の教師・大村はまの授業を物語っていると推測することができる。

さらに続けよう。

期末考査の日、他の教科の成績が悪くがっかりと落胆した様子の生徒がいると、必ず決まったように声をかけ、「どうしたの」「何があったの」と尋ね、一人の生徒でもそんな悲しい顔をしている者をそのまま帰宅させるわけにはいかないという真剣な気持ちに接し、生徒たちのほうが逆に驚かされたという。また、作文の授業の中で、悪い例として例示した作文の作者に対しては、必ず、その次の機会に、本人の新しい作品を取り上げて、その当人の落胆振りを必ず相殺させるという用意周到な(!?)仕事ぶりも行なったという。別の学生は、亡くなった母親の面影を大村の中に見出し、その大村に生きる勇気を与えられたと語る。その同じ生徒はその大村を母のように慕い続け、「(勲五等瑞宝章の)叙勲祝いの集いの会」で会えることが嬉しくて嬉しくて、ただひたすら大村に会える>という一念で、家事をしながら「わずか一日」で大村を慕う短歌を16首作って

しまうという教え子もいた。当時すでに50歳代の<教え子>だというのが……。余談だが、この歌集の編集担当の人は、この元教え子の気持を察してだろう、<この歌集をあなたから大村先生におあげして下さい>と、一冊余分に贈ってもらったという話も記録されている。

諏訪高等女学校の大村は、それほどにどの生徒にも<姉であり友であり母>として接したということだろう。

さらにそれらの手記を読むと、10年間の教師生活を終えて、諏訪高女から東京府立第八高等女学校に転出した後、大村は、諏訪高女の生徒(元教え子)で、たとえば医学部志望の学生には、<都会の医学部志望の学生たちがどんなふうに勉強しているのかを知るのもいい>と言って、東京での夏季ゼミナールに参加させたりもしたことがあったし、さらには、東京女子高等師範(現・お茶の水女子大)の受験生には、大村自身が通信教育をして受験に備えさせ、受験当日前後の数日間を東京の自宅に泊ませたりもした。教師・大村はまの活躍するところがそのほかのどこにあったろうかと思われるほどに教師として十分過ぎる日々を送った。と言ってそれは必ずしも目立ったものではなく、むしろ地味で静かなたたずまいの中に教師・大村はま女史がいたことを多くの手記は語っている。

「潔癖の芯の強さのある半面、非常に温か味のあるやさしいお人柄を忘れることは出来ません」と語る生徒、「いつもにこにこしていらっしゃっても、どこかにきびしさを感じてか、いつもしーんとして、先生のおいでを待っていました」と語る生徒、「教室での先生の授業は、柔かな静かな口調の中に、どこかきちんとしたきびしさをもったものでした」と語る生徒もいる。そのうちの一人は、適切すぎるくらいに次のように語っている。

「先生の国語教室は、たとえてみれば親鳥を迎えて活気づくひな鳥たちの巣のようなものでした。機を逃がさず、次々と運んで下さる餌を、どの子どもどの子ども大きく口を開けてわれ先に呑み込みました。」

まさに大村は、「啐啄同時」の教育の理念、原則を巧みに実行していた。

大村が諏訪高等女学校に赴任したのは22歳のときである。大村は、自身で「二十三(歳)」と言い間違いをしているが(p.27.)、それから10年間はここに教師として勤めたわけだから、ここを転出した

ときは32歳。しかも当時の高等女学校の生徒たち
と言えば、現在の「中学校1・2・3年生」と「高
校1・2年生」。生徒たちの手記によれば、大村自
身が年齢よりやや年上に見られたいと考えていたの
だろうか、比較的黒っぽい地味な和服姿だったと
いう。他方、生徒たちは年齢にして12歳から17歳。
これらのことを前提にすれば、この最後の「大村は
ま評」は最も妥当な評なのかもしれない。

中には、入学式の日、「一年三組担当として私た
ちの前に立たれた時の印象は忘れない」と語り、
「それは足元から脳天を突き抜けるような鮮烈な感
動でした。初対面で震える程に心が動くなんで、そ
の後の人生の中でもないことでした。・・・もし
かしたら当時の諏訪では見ることの少なかった私の
「理想像」としての直感だったのか、あるいは先生
の今の日の在られようへの予感だったのか」と鮮烈
な言葉で語る生徒もいる。

この当時、既に田舎・地方と都市部・大都会との
文化的な格差、経済的格差がある中で、諏訪という
地方の娘たちが描いた「女性としての理想像」を、
これらの生徒たちは生まれて初めて、大村の中に見
出したのかも知れない。

手記はまだまだ続く。

修学旅行中に高熱を出した生徒に対して、寝ずに
看病し翌日の観光も取りやめ看病を続けたことも大
村にはあった。

また姉妹が多く、叔母の家に一人預けられ、そこ
から諏訪高女に通っていた生徒に対して、新しい年
を迎えた時に、そっと<(正月休みは)実家へ帰っ
て来たの>と尋ね、首を横に振ると、この時、大村
は瞳を潤ませてその生徒に対して一言声をかけて
じっと見ていたという。

その生徒は次のように手記に語っている。

「そうだったの。」と慈愛あふれる、涙ぐんでさえ
おられる顔を見た時に、母にあえたような温かな
ものにつつまれて心がなごむ私でした」と。

戦時色が強まった時期の昭和十一年四月から十三
年三月に国語の授業を受けた生徒の中には、<先生
にお教えを受けた日々をなつかしみながら、いつも
不思議に思うことがある>と語り、それは、<当時
盧溝橋事件の起きた前後で^(注39)、世の中は非常時の
真っ最中、学校の校長訓話から始まり、すべてが戦
時教育でしたのに、(先生の)ノートの中には戦争
のにおいがしないことです>と記し、しかも、小学

校から専門学校まで、すべて陰気な戦いの中に(あ
って、まるで)スポットをあてたように明るく残っ
ているもの、それが大村先生に教えを受けた日々のこ
となのです>と記す生徒もいる。

また、諏訪高等女学校における大村はま女史の授
業は、たんなる知識の切り売りではなく、そのひと
言ひと言に、<人生いかに生きるか>という知恵を
にじませたものでもあった。

こんな中での諏訪高等女学校における日々は、わ
ずか10年で終わる。諏訪高等女学校における他の
教師たちの中には、強い意志と十分過ぎる実力を持っ
た女性教師・大村はまに対して、<ある種の敵対め
いたもの>、あるいは<煙い存在感>を感じとった
者も確実にいたらしい。それは、妬みとか羨望とい
うものではなく、<もっと気を抜いて教職に就いて
いたほうがよいのではないか>という忠告めいたも
のが混じったものだったろう。筆者にはそれ以上の
推測はなし得ない。一方、大村自身の後年の回顧で
は、<誰か或る先生が休講の形を取ると、早速、そ
の空き時間を下さいと教頭に言い出していた>とい
う。<それが他の教員の反発を買ったのではない
か>とも語っている。しかし、若い教師・大村は、
その当時、教師の仕事がバカに楽しかったのも事実
だった^(注40)。周囲の教師たちのそうした気運が、後
に大村をボイコットするという方向へと向かっていっ
た。東京府立第八高等女学校への転出を配慮し勘案
手配したのは、三村安治校長の後任として校長とな
った岩本義恭校長で、その当時、この人は、既に他の
中学校長として転出していた^(注41)。

後に諏訪高女時代のことを大村は、「半年、茅野
病院で療養したことと、姉(澄子)の死とだけが、
諏訪の生活に連なる暗い思い出である」と回顧して
いる^(注42)。そして大村は、後にこの諏訪という土地
を称えて「諏訪こそわが根」と語っている^(注43)。教
師としてのすべてが、諏訪で育てられ鍛えられたと
いうことだろう。教えることがバカに楽しかったと
いう諏訪時代、二ヶ所ほど長野県内を旅したことが
あるというが、それも教員たちの旅行の際であり、
諏訪の土地以外にはほとんど出たことがなかったと
いう。筆者の造語で言えば、大村は言わば「教える
こと」だけの「専業教師」をがむしゃらに続けたと
言えよう。学会などで、ヨーロッパ、その他に赴き、
散策を楽しむ余裕を示すのは、戦後の石川台中学校
の時期、昭和50年代前後以後からである。

VI 教師生活・第八高女から戦後の教育へ

・・・太平洋戦争と戦後の大村はまの歩み

1938年、昭和13年4月、大村は東京府立第八高等女学校（現在の都立八潮高校）へ転じた。

第八高女時代のことは具体的に語る資料が少なく、赴任直後山本猛校長に出会うこと程度しか記せない。しかし、諏訪高女の元生徒たちと同様、大村の還暦記念の際の1966年の、大村の元教え子たちの手記がある程度この時代の^{大村の}仕事ぶりを明らかにしてくれている。諏訪高女の教え子たちの回顧と同様の形で記す。

＜東京府立第八高等女学校の教師・大村はま＞

大村が第八高女へ転任した時は年齢にして32歳前後である。およそ十年間の諏訪時代に比べれば、いくらかベテランの域に達したこともあったろうけれど、教師としての大村の力は、第八高女の生徒たちにも確かなものとして受け止められていたことは間違いがなく、また、戦時色が濃くなるにもかかわらず、大村はまったく力を加減することなく真摯に子どもたちに向かっているのが注目される。

元生徒たちの手記である。諏訪の生徒たちと少し違うのは、手記を書いた時点（1966年）の年齢が、彼女たちのほうが10歳程度それぞれ年下だということである。

＜宿題もたっぷり出されて、他の課目の宿題と重なりだ**いぶ**苦しんだ思い出もあるが、驚いたことは、その宿題の評価の細かいことだった。文字の書き方、考え方、まとめ方、ノートの使い方などについて、一つ々々評価されるので、いい加減なことはどうしてもできなかつた。ひと口で言えば大村先生の国語は苦しいこともあったけれど楽しい、いつも充実した授業の積み重ねだった。＞

＜私が自分の作文の感想に、夢中で書いたからよいものができたと思うという意味の文を書いたことに対して、「夢中でやったことがよい仕事であるとは限りません」と大村先生が作文の評に書かれました。今もこの言葉を思い出し自戒させられます。＞

＜先生は徳富蘆花の「竹崎順子」を読まれた上で、「その中に、『捨てればくずですが拾えばくずはありません』という言葉があって非常に感銘した」と話して下さった。そして、「ちょっとした糸屑一本でもそうですが、まして人間には、くずだから捨ててもいいという人はひとりもないはずです」と静かな

確乎とした語調でお話しを結ばれた。今、私は或る私立学校で教師をしているのですが、教育者としての先生の覚悟のほどが今になってわかるような気がしてきています。＞

＜国語の授業は実にきびしくまた楽しかった。一分も油断ができない。それこそ真剣勝負の授業だった。＞

＜先生は、折にふれて「書き損じても、ノートを破るものではない。ノートを破る時の一瞬のうしろめたさが、度重なるうちには、いつの間にかその人の顔に暗い影となってしみついて行く」という言葉を語られたが、そのことが何度も思い起こされる。今にして思えば、やり直しのきかない人生への指針として聞こえて、心にしみてありがたく思っています。＞

次の思い出の手記は、特に「教育とは何か」を考えるという点で、私たちの目をいわば釘付けにさせてしまうところがある。（強調点の箇所^に注意。）

「事に当たって**真剣**そのもの、そして、ご自分に対して**厳しい**態度が、胸を打ち、また、生徒の作文など、決して職員室の机の上に開き放しになさらないような、人の気持を大切になさる優しい心づかい、物事を表面だけでなく、あたたかな眼で深くみていてくださるとい**う**安らぎがあ**っ**て、その頃の私には先生の言葉がまことに素直に心に入**っ**てまいりました。/**優れた**国語の授業をして**い**ただいたことはもちろんですが、**感じ**易い年代に、**本**気で、**これ**ほど**素直**に**人**の**言**語**を**受**け**入**れ**る**と**い**う**体**験**を**も**た**せ**て頂**い**たことは、得がたい幸せと思**っ**てお**り**ます。」（強調点は引用者。二ヶ所敬語の接頭辞を略す。）

その他、太平洋戦争のため、高等女学校が「五年制」から急に「四年制」になったことを嘆く生徒、兵隊たちの着る雨ガッパ製作のためにミシンを踏んだり、レーダーを作成するためにハンダごてを握ったなど、次第に戦争のために好きな国語の授業も数えるほどになり、どんなにつまらなくな**っ**たかと嘆く手記もある。

いずれの生徒の手記も、「国語の授業」の前に＜好きな＞＜楽しい＞＜厳しかったが待ち遠しい＞＜気迫のこもった＞の言葉が並ぶ。

さらに、大村先生は教科指導だけでなく、と書き綴り、＜生徒とともに運動着に着替え、トイレの清掃には、モンベ姿の先生が黙々と働いておられるの

をよくお見かけした」という手記もある。もちろん上で紹介したのは、それぞれの生徒の文の一部を抜粋したのだが、この最後の描写は、諏訪高女の教鞭の子のものにも二・三見受けられる。

大村が捜真女学校の寮生活で「特定の場所の掃除をすることによって、生活費を免ぜられた」という体験が、こんなところに生きていると思うのは筆者一人だけではないだろう。すなわち、諏訪高女の元生徒たちの手記には、大村が衣服を着替えて既に清掃をしようとする姿を見て、彼女たちがそれを止めていることが語られたりもしている。

第八高女の生徒たちの手記に戻る。

くどの学科も終わりのベルが待ち遠しかったあの頃でも、先生の国語の時間だけは、待ち遠しいはずのベルの音が恨めしくて残念でならなかった」というものもある。その理由は、その生徒の言葉にあるように、<自然に衿を正すような授業になる、それは、厳しい顔や怖い顔になるというのではなくて、一つ一つが真剣で、いい加減にすまされるということがない>からだったと考えられる。果たして、この時期、受験や進学競争が激化していたというわけではないのももちろんのことである。

結局、大村はまの第八高女における仕事ぶりは、まさに諏訪時代とまったく変わりがなかった。同時に、両方の高等女学校の生徒たちの文章の巧みさは特筆すべきである。

第八高女のもう一人の元生徒の手記である。

「三年生の冬のことであった。私の姉の夫が戦死した。保証人でもあった関係で、主任の大村先生に報告に廊下に出たとき、思いもかけぬ涙がどっとあふれて、報告もとぎれとぎれであった。先生は抱くように私の両肩に手を置かれて、その手にときどき力をこめておききになった。その間、終始一言もおっしゃらなかった。」

こうして第八高女の生徒たちと過ごした大村だが、しかし大村自身が戦争に協力加担した事実は、どう後悔しても後悔のしすぎではなかった。前稿でも紹介したが、軍事教練を行なったその同じ場所で、<平和で民主的な文化国家の建設を！個人の基本的人権云々を！>と語ることは大村にとっては耐えられないことだったのは間違いない（p.35～36.）。

<寂しく生きた次兄・勝雄兄様>のことを作文にした大村はまは、それが少女時代のものだったとしても、自分で自分をごまかせる人では決してあり得

なかった。自分で自分を許せなかったのだろう。大村は、新しい教育制度の下に発足した「新制中学」に出ることを決意した。望めば、そのまま第八高等女学校（現・八潮高等学校）の国語教師として残れたはずだったが。

「あわれむ目や、笑う目を感じながら、ひとつの悲願のようなものを抱いて、中学校へ出た。」

大村はまの『教職生活五十年』の折りに記された祈りにも似た大村の言葉である^(注44)。

<戦後の大村はまの教師生活>

・・・孤高の教師生活

大村が中学に赴いたとしても、或る意味では不思議ではない。理由は、大村が女性だったということからであろうか、戦前の高等女学校時代は、概して一年生二年生の国語を担当していたからである。特に諏訪高女ではそうだった。したがって大村は一度もそのことを言葉に出してはいないが、ちょうどこの新制の中学生は、大村にとっては<教えがいがある子どもたちだ>と感じていたのではないかと推測される。すなわち、この年齢段階の子どもたちの心理に関しては、大村は経験的に知り尽くしていたと思われるのである。しかしこれは筆者の推理にすぎず、適切かどうかは確言できない。むしろ、大村の近くにあった人に確認しなければならないことのように思う。現実には、東京府立第八高女においてはかなり高学年のクラスの生徒たちも受け持っている。また、この高等女学校の先生方は、『還暦記念』文集の写真で見ると、ほとんどが女性でもある。戦争が何か関係しているのかも知れない。そうした課題も残して先を進めるが、戦前も戦後もまったく大村に変わりがなく一つの信念のようなものがあつた。それは、教師はいつも最高の自分でなければならないという一つの信念である。それを教えてくれたのは誰だったのかは明らかにされていない。しかし、現在で言う中学2年生の時の大村の作文、「初めて日曜学校を教へに行った日^(注45)」は、子どもなりにそうした真摯さに満ちている。

この論考の最初のほうで述べたように、人それぞれを軽んずること、また安易に干渉したりその存在を軽視することを差し控えることの大切さを、大村は既に家庭の中の空気は無意識のうちに学んで来たのかも知れない。言葉を換えれば、一人ひとりの人その人を人間として尊び、その人間の気高さを

大切に扱い、それが脅かされている人に対してはく大きな愛情で守ろうとさえする」という信念がそれであった。したがって、教職に就くことに憧れていて (p.52.p.70.)、それでいて人に接することの恐れ (恐れ) の大きさと重さを大村は嫌というほど感じながら教職に就いたとも言える。或るところで大村はそのことを明言している。それは、教師が、子どもたちにとっての適切な時期を逃がしたなら、それはもう取り返しがつかないのだという断定口調として語られる。

「みなさんは、教育の場が、いかにかけがえのないところか、また若いから失敗してもよいということとは絶対はないのだと、はっきり認識してほしいと思います。つまり、子どもは再びその日を迎えないし、その時間も迎えない。教師たる自分は、最高の自分でなければならないことはいつだって変わりがない。若いなんてことは、なんの申しわけにもなりゃしない。失敗したら、もう償いようがないのです。こういうことを考えますと、教師というものは勉強しなければならないものだとつくづく思います。」 (p.19~20.)

「失敗したらもう償いようがない」と語られるその対象は、もちろん、成長途上の子どもたち、そして、成長することが期待され、またその権利を保証されているはずの子どもたちのことである。

大村は、どこまでも「成長し発達する権利を具有した子どもという存在」をなんのかけねなしに、「第一義的」に考えていた。それは、ひたすら直感的にと言えるものであり、ほとんど本能的にと言ってもいいものだった。それは、教師・大村と子どもが接点を持ち、また出会うことができるのは、「子どもが成長し発達するという事実」を介してだけであったということの意味する。

大村のこうした信念が続く限り、その国語の授業の方針や、また授業様式や形態が、どのように変わろうと、筆者にはそれは大きな問題だとは思われない。この信念をどれだけ強く自覚されているかが教師の資格にそのまま直結していると思われる。

☆ ☆ ☆

大村は、戦後、昭和22年、1947年5月1日、江東区深川第一中学校に着任し、翌日5月2日が開

校式だった^(注46)。

戦後の新しい学校教育の始まりだった。大村の「単元学習」の始まりでもあった。この後、大村は、大村の持っている教育信念に似た信念のひとつかけらも持ち合わせのない教師たちの中にあって、さまざまな受難の道を歩むのは、前回記した筆者の論考で明らかであろう。すなわち、現在はそのような言葉を語る人がいないだろうが、戦前及び敗戦直後は、都心から見て隅田川の向こう側の地域は「教員の捨て場」と言われていたという。したがって、この地域に着任した大村はま、つまり「元高等女学校の女教師」は、当時、さまざまな風評に悩まされ大きな苦難に遭遇するが、文部省にいた石森延男 (昭和23年、1948年1月に「作文の会」を設立し委員長に就任。児童文学作家)、その他の文部省の人たち、さらに山口喜一郎が、大村の「単元学習」の実際を見たいということで来校したりし、次第に、教師・大村の実力が認められていった^(注47)。

その後の足取りを見ておこう。

深川第一中学は、昭和23年の1948年12月まで勤めた。ここにはわずか1年半しかいなかった。

昭和24年、1949年1月、目黒区第八中学校に移る。

校長が同じ国語の専門家ということで大村の着任を強く要請したが、当の校長が次第に実力を持っている大村を疎んじ始めた。大村によれば「目黒八中時代の私の教室には参観の方が多くて、(私)一人で授業していることのほうがめずらしいくらい」だったという^(注48)。大村の「単元学習」が多くの教師から注目されていたからである。文部省で開かれる委員会・会議に、大村と目黒八中の校長が同席するということもたびたびだったが、校長は何ら発言もできず、しまいには口惜しさのあまり校長が文部省からの会議の案内状を大村に知らせない、渡さないということも起きたらしい^(注49)。この昭和20年代は、倉沢栄吉の言葉の通り、<お迎えする時にはにこにこ迎えて、後、大村を虐げた>というケースが少なくなかったことになる。さらに、大村が語った言葉どおり、「それにしても中学は高女とは違う世界で、何がつらいと言って、妬み」という大村自身の言葉も理解されるだろう^(注50)が、しかもそれを率先していたのが男の教師で校長となると<日本における妬みの根源>も根が深いと言わなければならない。「男の妬みもここに極まれり」「男の妬みも見事

だ」という感想が残る。しかし、大村はこの中学では、討議の指導、個人差に応ずる指導、グループ学習の指導、文学の鑑賞などの開拓に向かった^(注51)。

この目黒八中の在籍は、ここもまたわずか2年半だった。

昭和27年、1952年9月、中央区紅葉川中学校に転ずる。ここには4年間勤務。(本文「I 誕生から幼年期」の「注1」を参照。)

昭和31年、1956年4月、同区内文海中学校に転ずる。

この年代は、中学から高等学校への進学率が、既に全国平均で50%を超えており、大都市部、地方の都市部では受験競争が胎動または激化の様相を呈し始めた。ここでも、目黒八中の時に似た難題が校長から引き起こされた。校長の妬みから来るイビリがチクチクと始まった。大村の娘に当たる年齢だった(20歳代半ばぐらい)という同僚・上山民栄と意気投合して研究授業を行なったりしたが、この上山民栄は、大村をかばい、校長と口論及び激論をした挙げ句、日本に嫌気をさしてついに渡米。その後、ワシントン大学の日本語準教授になる^(注52)。

昭和35年、1960年4月、大田区石川台中学校に転ずる。

この中学が大村最後の勤務校となる。前稿で記したように、ここで数々の研究会を開くが、他方で、校長にいびられ、教頭にいびられ、泣きっぱなしの日々を送った。

昭和36年(1961年)、東京都教育功労賞を授与される。これは、全国の中学校長会の会長を歴任した等の行政職で功労があった人、または、人命救助に当たったという場合に限られ授与されるものだが、一教員でしかなかった大村は、むしろ、その受賞を怪訝な印象で受け止めた。

昭和38年、1963年、広島大学教育学部からベストタロッチ賞を受ける。筆者の知る限り、『村を育てる学力』でよく知られ、また作文的教育方法でもよく名前の通った東井義雄氏が受賞したことのある賞である。昭和30年代、40年代を通して、小学校の教育実践家として著名な人を挙げるなら、群馬県の斎藤喜博が<東の大教育実践家>だとすれば、東井義雄は、<西の大教育実践家>だったと言える人だった。

昭和40年、1965年11月末、母永眠。

周りにあるものすべてが母親の思い出に連なるも

のであり、どうかしたかと思われるくらいに寂しさと悲しみに狂ったという。ついに大村は、経済的な豊かさの中で母を幸せにする道を閉ざしたのである。

この時期までには、既に、有名なさまざまな単元学習を実践している(前稿を参照)。

昭和45年(1970年)8月、大村に大きな転機が訪れる。富山県教委の依頼で、新採教員を前に「[演題]教えるということ」の講演を行ったことがそれである。3年後に刊行された『教えるということ』(1973年、共文社)にその講演が収録され、大村のよき理解者・倉沢栄吉の言葉を借りれば(1983年)、この書が全国何百万人の人の心をゆさぶる一書となる。その著作は、2008年1月現在で51刷で、現在もまだロングセラーを更新中。(初版が1973年だから、この時点まで35年間のことである。)この文献で、大村は一躍教育界における渦中の人となる。NHK テレビなどでも取り上げられる。

しかし、石川台中学でのイビリはなお続く。

昭和52年(1977年)度のこの年から3年間続けて、中学1年生を受け持たされる。受験準備教育に熱心でないというのが理由だった。

昭和55年、1980年3月、教師・大村はま女史は退職を決意し退く。

その理由はと言えば……。中学1年から3年生と続けて3年間受け持ってきて、生徒たちを知り尽くして初めて自分の単元学習が実るといのが大村の考えであり基本的な方針だった^(注53)。しかし1年間だけの受け持ちと「週27時間の授業」では、生徒たちの名前も性格も把握できずまた覚えられなくなり、大村はついに自分の単元学習の実践の終りを自覚して、退職を決意し、現実に退職。

その3月31日に図書室に出向いて図書の整理をしたあと、生徒たちと一諸に玄関あたりで写真を撮っているものがあるが^(注54)、生徒たちには、大村の退職は知らされていなかった。大村、74歳。教職生活の52年目が終わる春だった。

その後、昭和57年(1982年)から筑摩書房から、『大村はま国語教室』全16巻を一ヶ月に一卷の予定で刊行。最終巻の出版は、昭和60年(1985年)、『別巻 自伝 実践・研究目録』。出版社の意向で、毎巻を心理学者・波多野完治に贈呈する。その波多野完治の返事のはがき・書簡が後に見つかり、『22年目の返信』(波多野完治と大村はまの往復書簡集)が刊行される(2004年、小学館)。

この昭和57年に「勲五等瑞宝章」を受章。しかし、この事実はこれ以後の大村の著作の中ではあまり言及されていない。理由は不明だが、二つ考えられることが挙げられる。一つは、人それぞれを尊いとみなした大村自身の考えに反して「受賞を受けた」ことに対する慎重なさまがあった。同様なことになるが、本文で言及した沢田美喜は、1972年に「勲二等瑞宝章」を受けていたことを知ったからではないかという推測……これらのことが考えられる。ちなみに「瑞宝章」というのは女性に与えられる「賞」だという。敢えて指摘しなくても、芸能の世界で（演劇人・女優）、たとえば文化勲章の話が出ながら断った人もいる。大村は自身の軽率さを恥じていたのかも知れない。

1995年、大村のよき理解者・倉沢栄吉の申し出により、VTR記録『大村はま創造の世界』の録画撮りをする（大空社）。資料集めもあって、録画撮りは春から秋にかけてなされ、総時間5時間に及ぶVTR記録となる。1996年完成。『大村はまアルバム』が添付される（前稿参照）。

この間にも大村は数々の著作を著した。……1988年『教室に魅力を』国土社、1989年『教えながら教えられながら』共文社、1990年『「日本一先生」は語る』国土社、2004年『灯し続けることば』小学館、2005年『学びひたりて』共文社、同年9月『教室に魅力を』新装版出版（国土社）。

2005年4月17日、「いつでも本気の人、一生けんめいの人」、「心にもないことはなめらかに言えない人」、「ことばを愛し、ことばを育て、ことばに忠実だった」人、大村はまは、生活支援型高齢者住宅の一室で、独りで静かに永眠。享年99だった^(注55)。

そのほぼ90年前の1913年に大村はまの次兄・勝雄が亡くなったのは「3月17日」であった。その一ヶ月違いの月命日の同じ「17日」に大村が亡くなったのはたんなる偶然だったろうか。大村は前掲『教職生活五十年』の中では（1978年、大村はま72歳の時）、この2歳年上の「兄・勝雄」のことを「次兄は病身で口をきくことも歩くこともできなかった」といねいに記述している。長兄・維雄のことは同じ箇所「札幌で上の兄を失い」とだけ記されているのと対照的である。また前稿の冒頭で筆者は、〈書くこと〉に関わって大村が次のように語っていることを紹介した^(注56)。それは、何か次兄に関連し

ていたように思うのは筆者の考えすぎだろうか。

「そういう、その子の人生を築くための力、その生きていく力の一つに、「書くこと」というのがあるのです。それは人に褒められるようなものでなくともいいのです。つまり、書くことは歩くということと同じように……（それは）歩けなければ不幸せです。きれいに歩ければ幸せです。そのことと（ちょうど）同じように、……心の中を文字というもので表現する力です。」

1978年、大村がこのように述べている時、この大村の心の中に、自分が小学生になる直前に夭逝した「次兄・勝雄兄さん」のことがまったく意識されていなかったと誰も断言することはできないだろう。

おわりに

前稿「大村はまの教育の世界」（2008）を補う意味から本稿を記した。第一に、戦前戦後の大村の教師生活の舞台となった学校の紹介は上の通りである。また、それらの学校での大村の働きぶりの若干は、読み手に伝わったと思われる。第二に、大村はまの子どもの頃の心のありようがこの中に二点ほど記すことができた。長兄と次兄の死に接した際のことである。それらのことを通じて、大村が、自分で自分を育て育み幼少女期を過ごし、青年時代を過ごしたことを確認することができた。しかし、第二の件で言えば、やはり、両親が育んだ家庭の空気、雰囲気、特に大村の場合、母親の存在が大きかったように思われるし、他方、彼女の通った小学校の教育体験も無視できないものがある。また大村は、それぞれの年代で、それぞれに課せられた課題に直接にまた前向きにぶつかって初めて人間は何か或るものを得ていくのだということ、それはあまりにも平凡すぎるのがらだが、……前稿の拙論で言えば「Iの言葉」の解説箇所では筆者が説明した^(注57)。

そんなことをあらためて感じながらこの大村の心の軌跡をたどってみた。それが本稿の成果だと言えよう。

それにしても、第八高女で「糸くずの話」をした時、大村の心に去来したものはなんだったのかと考えざるを得ない。まさか、高等女学校の生徒たちのことを念頭において、何かを意図して、あの話をしたとは全く考えられない。まして、幼少期・女学校時代・東京女子大時代の自分の極貧に近い貧しい生活に意味をあてはめていたとも思われぬ。込めて

いたそれは何か。大きな疑問が残る。しかしここに大村はまの人間としての、また教師としての大きな存在価値が示されており、それがいかんなく発揮されているように思われる。

それは天逝した二人の「兄」、特に<次兄・勝雄兄さん>のことが脳裏にあったのではないかと、今、あらためて考えている。その時の授業は、いくぶんか主題から逸れた偏りのあった授業になったと思われるかもしれない。しかしそれだけ大村には、幼い頃の次兄・勝雄兄さんのことが忘れられない深く重い記憶となっていたものとも思われる。本文の末尾に記した通りである。

戦後の大村は、諏訪と第八の高等女学校時代と打って変わって、人間的に「キック研ぎ澄ました」感じがして来ると感じるのは筆者だけだろうか。少なくとも諏訪と第八の二つの高等女学校の大村はあたかも『二十四の瞳』（壺井栄著）の主人公の女教師のように見受けられるのだが、その面影が次第に消えて行く。『教えるということ』の中の大村は、もうすっかり「闘う女教師」という姿を打ち出している。倉沢の言葉を用いれば、大村の世界はここでもまた「広くて深い」と言わなければならない。<教師・大村はま>と同時に、<人間・大村はま>の研究の道は果てしなく続くだろう。

<注>

「はじめに」の「注」

(注1) 拙稿「[資料]大村はまの教育の世界」、富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要『教育実践研究』第3号所収、2008年、p.111~136.

(注2) 四百字詰め原稿用紙にして「162枚」に相当。これは、(岩波)新書版に比してみれば「四割」から「五割」に相当する。たとえば、最近話題の著作『ルポ 貧困大国アメリカ』で言えば、ほぼ半分に対応する。

(注3) 授業と学びに<楽しさ>、または、<楽しみ>を求め追求しようとする大村の姿勢は到る所で語られている。たとえば、大村は<五十年間、子どもに楽しい国語教室をと願い続けてきた>と語った上で、「国語教室が楽しくなければいけないのは、楽しくない心は何も本気で考えられなくなりますし、何も覚えられなくなってしまうからではないでしょうか。・・・子どもは今はまだ未熟ですからなおさらそうだと思うのです。です

から楽しくないということは、つまり、教育ができないということです」と語っている。1980年講演「子どもに楽しい国語教室を」『教えながら教えられながら』（1989年、共文社）所収、p.11. また、前稿で扱った『ちくま』1982年12月号も参照(p.11.)。

(注4) 大村の生涯を記すとすれば、どんな点に注目するかによって、さまざまな叙述が可能である。単元学習の生成と発展、及び、そのことと戦前の高等女学校における授業実践との関連、戦後教育史における大村の著作『教えるということ』の意味と意義、また大村の人生におけるこの著作の意味、貧しい家庭生活と生い立ちと、及び、高い学歴の中にあつた大村の女学校時代の生活、猛勉強家大村はまの素顔、クリスチャン・ホームと大村の性格形成、戦後の公立中学校史と大村はまの教師の日々、兄弟・父の死と大村はま、戦前の大村はまとその教え子たち、教え子たちの思い出と大村はまの教師生活など・・・どれに焦点をあてても、一冊の新書本が著せるくらいである。いわば<世界のホンダ>の、あの本田宗一郎に関する著作が二・三百冊あるのと同じように、大村はまに関しても同じぐらいの著作が著せると考えられる。本稿ではそれらのうち最少限のこと・・・つまり本文で述べたように、大村はまの教師誕生の前後の歴史と教師生活のことを若干記す。

(注5) VTR記録『大村はま創造の世界』（大空社、1996年）に添付された『ガイドブック』に、大村はまの「年譜」が記されているが、ここにも誤記が一部見られる。「次兄・勝雄の死」を「大村はまの小学校三年生」の時と記されているが、これが一例である。その他、本論考にも「注」の中で指摘した。

Iの「注」

(注6) 戦後出向いた紅葉川中学校（昭和29年9月転入。後述する。）では、一人の欠員のあるところに大村を慕って赴任して来る教師がいたが、その教師は大村との間のあまりにも大きな力の差に苦しみノイローゼ気味になったらしい。大村もまた、その教師にどう接すればよいのかと苦しんだという。結局、この人をそっとしたまま大村は文海中学校に出た。大村はこの時のことを「大変神経が疲れていまして、困っていたことがあったからです」と語っている。この一人の同僚に対す

る態度が大村の信念・信条を明らかにしているように思われる。〈結局人はみずからを自分の力で助けるしかない〉と。これが大村はまの「個人主義」である。『原田三郎（聞き手）』、p.204～205。

(注7) それらの作文は、本文と「注」のなかで触れる。戦前の学校制度の中では、尋常小学校（六年制）に続く公立（県立）の高等女学校も私立の女学校も概して「五年制」だった。したがってこれらの女学校は現代の、つまり戦後の中学校の「三年間」と高等学校の「二年間」を併せた就学期間に相当する。例外的に「六年制」のところもあり、たとえば大村はまが最初に進学した「共立女学校」は「予科一年」を含めて「六年制」だった。なお、戦前は尋常小学校の三年から「男女別学」が普通であり、ここを卒業後、男子の進学する学校としては「中学校（旧制）」があった。現代の学校制度に該当する就学年数は、「高等女学校」に等しい。つまり「五年制」だった。にも関わらず女子の場合は「高等女学校」と呼び、男子の場合はたんに（旧制）「中学校」と呼んだのは、女子の進学する教育機関としてはここが最終到達点だという「男尊女卑」に基づく女性蔑視観が当然であるかのように当時の社会全体にみなぎっていたからである。しかし、太平洋戦争が進行するにつれて、「五年制」の「高等女学校」も「中学校（旧制）」も四年制に短縮された。さらに敗戦色が濃くなって来た頃には、両者の教育機関はほとんど教育機関の呈をなさなかった。勤労働員が日常の生活だったからである。「高等女学校」も「中学校（旧制）」も、進学率は年代と地域によってかなり異なるが、概して多い場合「10数%」、少ない場合は「数%」。両教育機関に進学する人たちの数・割合は、現在の大学進学者よりもはるかに限られていた。どちらの学校も、学力優秀と同時に経済的な裕福さを必要としており、ここに進学する子どもたちは、選ばれた人の中のさらにまた選ばれた人たちだった。地方で言えば、大きな商店経営や問屋等の家庭の、さらに官吏の家庭の子女・子弟が進学するにとどまった。実業学校も当時から「中等教育機関」とみなされていたので、「中等教育機関」の就学率は統計上はもっと高く記されていることもあるので注意を要する。

(注8) 前掲誌『ちくま』1982年12月号所収。

(注9) 『国語教室』別巻所収、p.19～22。大村は

まの作文「兄さん」。この中には「四つの時に北海道へ行ったこと」「八つまでここに居た」とあるが、これは「数え年」で語ったか、それを計算し間違いしたかで、捜真女学校の三年生の時点における大村の間違いである。

(注10) 同書所収、作文「性格」「静けさと悦へ」、p.49～58。「性格」は捜真女学校の五年生の時点で、尋常小学校五年生の頃の事を回顧して記しており、「静けさと悦へ」は、捜真女学校五年生で、同校同学年当時の事を記している。文章からは、大村が当時自我意識が非常に強かったことが窺い知れる。級友からの評価を気にしながら、それでいて飽き足りない自分をみつめていて苦しんでいる。〈努力とは目的を達するためにある手段ではなく、努力それ自体が生甲斐だ〉という結論を得、また、〈自分の心の中にあるものを文にすることが悦（よろこび）である〉という境地に達している。

(注11) 『国語教室』別巻、大村はま捜真女学校の三年の時の作文「寂しく生きた兄」p.34.及び『学びひたりて』p.47.

IIの「注」

(注12) この新しい教育運動は、今日「新学校運動」とも呼ばれている。欧米から移入された新しい授業理念と授業方法の採用と普及、及び、新しい教育理念を持った小学校が数々創られた。成城小学校、玉川小学校、自由学園、明星学園、池袋児童の村小学校などがその一例である。その他、奈良女高師附属小の木下竹次による「合科教育」の提唱と実践、明石女子師範附小の及川平治の「分団式動的教育法」が主張され、そこでは子どもの自主的で自由な活動、作業（Arbeit, occupation）、経験（experience）、及び、子どもの個性、自発性を重視した尊重する教育風土が育っていた。

(注13) 『教職生活五十年』所収、「今日の日まで」、1978年、p.58.

(注14) 『原田三郎（聞き手）』、p.79～85.

(注15) 同書、p.85.

(注16) 『国語教室』別巻、筑摩書房、1985年所収、「寂しく生きた兄」、p.31～35。原文は、旧かなづかいが用いられている。が、促音便の「つ」は「っ」と訂正した以外、その他は原文のままである。原文のかな遣いは、現代のかな遣いに変換

するなら、「思ふ」は「思う」であり、以下「考へる」は「考える」、「だらう」は「だろう」、「かはいさうな」は「かわいそうな」、「といふ」は「という」、「やうな」は「ような」等である。

(注17) 毎日新聞社論説委員の原田三郎は、捜真女学校三年時の大村の前掲文「寂しく生きた兄」に関して次のように記している。「二番目のお兄さんのことでも、ふつうの少女でしたら、これほどまでに赤裸々を書くことはないだろうなということも、本当に客観的に書かれている。びっくりしました」と。同時に、「作文が大変好きになったようですね」とも確認している。『原田三郎(聞き手)』, p.85.

(注18) 大村の作文中の文言をもじってさらに深めて言えば、現在の私たちは概して、「自分さえ学業成績が優れまた安定しているなら、他の人の学業不振または学業上のあがきは、その人の罪のような気持でながめるある種の冷酷さを持った人間」だと語ることもできよう。

(注19) 『学びひたりて』, p.47.

(注20) 教育心理学においては、通常、「思春期」は英語で *puberty* があてられる。しかし、男子と女子の思春期は年齢に若干の違いがあると言われ、女子のほうが年齢が早いので、敢えて *adulthood* をあて「女子の思春期」を意味させた。

(注21) 夏目漱石『夢十夜』所収、安部昭「解説」, p.182. 岩波文庫、1986年。

Ⅲの「注」

(注22) (注22) と記した本文の「注」はいずれも、前掲『教職生活五十年』所収「今日の日まで」, p.59.

(注23) 捜真女学校の寮では「一種のアルバイトをしていたわけなのです。こういう事情から、寮生活はもう必然のことになってしまっておりました。」「捜真女学校のころ」『国語教室』別巻所収, p.61.

(注24) 前掲誌、『ちくま』1982年、12月号, p.7. 大村のこの発言は前稿でも紹介した。

(注25) 『国語教室』別巻、「静けさと悦へ」, p.55.

Ⅳの「注」

(注26) 『国語教室』別巻では、大村はま自身が「ほんの手伝いであるが」(p.67.) と語っているが、この表現は日本人特有のぼかした表現に過ぎない。他の文献では、正式の「事務員」と記して

いる。

(注27) 前掲誌、『ちくま』, p.7.

(注28) 富山県教委の招待講演「教えるということ」(1970年)の中で、大村は、何の注釈もつけず「沢田美喜」を挙げているので、読む人によっては(特に若い人には)、沢田美喜が東京女子大の大村の先輩のように受け取られる可能性もある。がしかし、沢田美喜は東京女高師(現在の「お茶の水女子大」)の「附属女学校」を中退し(附属幼稚園からここに在籍)、後、家庭教師のもとで教養を身につけた。明治時代の財界を二分した三菱財閥の本家・岩崎家の三代目岩崎久弥の長女であった岩崎美喜は、すんなりと日本の学校教育に溶け込むことが出来なかったと推測してもよいが、現実には東京女高師附属女学校在学中にキリスト教に関心を持ち始めた娘に対して、家族がこれを心配し就学を辞めさせたのだった。後に国連大使になる外交官・沢田廉三と結婚、沢田姓となる。(沢田美喜『黒い肌と白い心』「聖書にひかれて」日本経済新聞社、1980年、p.32~40.) 本文で記したように、大村の意識に「沢田美喜」に対する憧れがいつ生じたのかは明確ではない。が、沢田美喜の仕事が始められたのは、昭和23年のことだから、その場限りの言葉だったとも考えられなくもないが、しかし、大村のその考えは、<戦後という時代、一つの岐路に際して発せられた>と理解するのが最も適切である。(沢田美喜『混血児の母』毎日新聞社刊、1953年。)一言付言。大村はこの講演の中で、「沢田美喜子」と語っているが、正しくは「美喜」である。また、この講演の中の大村は、何かの強迫観念に囚われているような言い間違いや言葉の乱雑さが目立ち不思議な感じを読み手に与えてもいる。

(注29) 『原田三郎(聞き手)』, p.92.

(注30) 大村はま『大村はま自叙伝 学びひたりて』共文社(2005年)には、「東京女子大時代」として特別に一章が設けられている。ここに学生時代のやや詳しい生活が記されている。遠い記憶によっているのだから、執筆内容は晩年の大村の任意な記述になっていると考えられる。

Ⅴの「注」

(注31) J. Dewey, *My Pedagogic Creed.*, 1897, p. 84~95. in *Early Works of John Dewey*, 1882~1898, Vol.5, 1895~1898.

(注32) 『原田三郎(聞き手)』, p.103.

(注33) 『教えるということ』共文社は、特にその最初から29頁あたりまではもちろんのこと、その全編が、戦後の公立中学、小学校の校長・教師たちに対する辛らつな批判で貫かれている。が、戦後の新制小学校・中学校長たちの〈勉強不足〉は、戦前の「師範学校」の教育内容の貧弱さ、荒唐無稽な内容、及び、戦時中であったことからの確な勉強を行えなかったことによろう。たとえば英語は、敵性語として使用が禁止されていた。

(注34) 『原田三郎(聞き手)』, p.106には、三村安治校長の本文で紹介した言葉以外の三村校長の率直な言葉が語られている。

(注35) 同書, p.106.

(注36) 山本茂美著『あゝ野麦峠』『続あゝ野麦峠』, それぞれ1977年, 1982年, 角川文庫。著者山本によれば、明治40年代には「百円工女」は決してめずらしくはなかったという。後者, p.113. 大村が諏訪に赴任した当時、女工さんたちの給料がもっとよくなっていたかどうかは、筆者には不知である。しかし、むしろ当時の日本の経済不況を見つめるべきかも知れない。

(注37) 『大村はま先生に学びて』広島大学教育学部国語教育研究室編(清水文雄, 野地潤家), 1966年刊, 及び『大村はま先生のご叙勲をお祝いして』大村はま先生ご叙勲お祝いの会発行, 1984年刊。この二つの文集のそれぞれの文を分析するだけで数点の研究論文を記すことができる。本文では教え子一人ひとりの名前を明らかにせずに紹介したが、後に明らかにしたい。

(注38) 前掲, 拙稿「大村はまの教育の世界」『教育実践研究』第3巻, 2008年所収, p.116の「注9」を付した「笠原美祢」の言葉。

(注39) 「盧溝橋事件」はよく知られているように、当時の言葉で「支那事変」、現在では「日中戦争」と呼ぶ戦争の端緒となった事件である。昭和12年(1937年)7月7日の出来事である。

(注40) 『原田三郎(聞き手)』, p.128~137.

(注41) 同書, p.138~141.

(注42) 前掲『教職生活五十年』, p.62. 全く同趣旨のことは、前掲の大村はま先生還暦記念文集『大村はま先生に学びて』p.183. その他にも記されている。

(注43) 勲五等瑞宝章受賞の際の「お祝いの集い

の会」(昭和57年9月9日)における大村はま女史の記念講演の題名である。

VIの「注」

(注44) 前掲『教職生活五十年』, p.62.

(注45) 『大村はま国語教室』別巻所収, p.16~17.

(注46) 戦後の新しい教育実践の出発となった「深川第一中学」の開校式の写真(大村も入っている)は、『総合教育技術』(小学館)1985年1月号の〈特集・写真で見る戦後教育40年事件史〉の3頁の最下方に掲載されており、これを含めて、大村が戦前戦後に教師として赴任した諸学校の様子は、『アサヒグラフ』1980年4月25日号(朝日新聞社刊)にグラビア特集として収録されている。「(特集)教壇生活53年 大村はま先生の〈卒業アルバム〉」p.26~33.

(注47) 具体的には、『原田三郎(聞き手)』, p.191~193を参照。

(注48) 同書, p.195.

(注49) 同書, p.196.

(注50) 同書, p.221. 本文の大村の言葉は石川台中学在職中の言葉である。

(注51) 前掲『教職生活五十年』, p.63.

(注52) 『原田三郎(聞き手)』, p.208~211.

(注53) 本文で述べたように、子どもたちを一人ひとり把握して初めて「単元学習」が生きるという大村の考え方は、『原田三郎(聞き手)』に詳しく語られているし(たとえばp.23), また、波多野完治との対談「大村はま=教師としての仕事」の中でも語られている。『総合教育技術』小学館, 1985年10月号所収, p.26. p.35~36. この対談は、1984年の同誌に一度掲載されている(10月号, p.32~50.)。さらに『かけがえなきこの教室に集う』(2004年, 小学館)にも再録されている。

(注54) 前掲誌, 『アサヒグラフ』1980年4月25日号。

(注55) 荻谷夏子『優劣のかなたに 大村はま60のことば』2007年, 黎明書房, p.9~15.

(注56) 拙稿「大村はまの教育の世界」, 2008年, 『教育実践研究』参照, p.112左。もともとは大村著『教えながら教えられながら』1989年, 国土社, p.115. 1978年講演中の言葉である。

(注57) 同上, 拙稿, p.112~114.

(2008年10月20日受付)

(2009年1月21日受理)

